

書家中林梧竹関連の新出資料についての考察

A Study in New Materials Related to Calligrapher GOCHIKU NAKABAYASHI

勝 目 浩 司 (福岡県立須恵高等学校教諭)
小 原 俊 樹 (美術教育講座 書道分野)

(平成二十三年九月三十日受理)

はじめに

富永友四郎と中林梧竹

新出の中林梧竹使用印

中林梧竹の書翰

前田黙鳳による中林梧竹への見舞い状

中林梧竹没後に送られた弔詞

おわりに

はじめに

平成二十二年の暮れも押し迫った頃、梧竹の使用印を所有されている方がおられると聞き、中林家四代目中林秀利氏とのお宅に伺ったところ、

ろ、貴重な中林梧竹関連の資料がみつかることとなった。本論では、その資料を公開整理するとともに、晩年の書家中林梧竹の姿を考察してみたい。

富永友四郎と中林梧竹

今回の資料は、富永友四郎にゆかりのあるお宅から発見された。内容は左記の通りである。

中林梧竹作品 十四点 (筆者確認分)

中林梧竹自用印 五顆

特別賛成者・発起人一覧 二種

中林梧竹の書翰 五通

前田黙鳳による中林梧竹への見舞い状 一通

中林梧竹没後に送られた弔詞 四通



富永友四郎（戸籍では「朋四郎」。後に戸籍も

「友四郎」と改字する）は明治四年（1871）生

まれ。昭和二十七年（1952）に没した。当時、

「佐賀財閥」ともいわれた深川造船所等の社員であっ

た人物である。梧竹が残した作品から、明治四十年

（1907）、梧竹81歳の五月、当時の深川造船所等社長家の別宅であっ

た福岡県大川若津の「天福客」揮毫作に、「富永君正之」と署名してい

ることから、富永友四郎と梧竹の出逢いはこの頃からと思われる。



掲載写真は、明治四十二年十月一日若

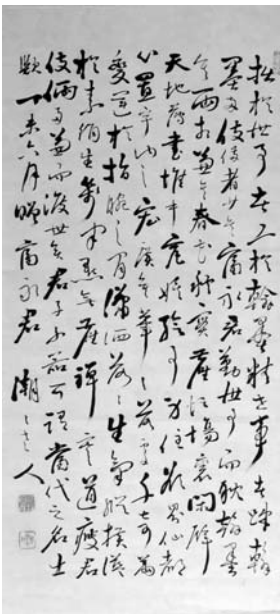
津深川別邸園（写真裏に明記）にて撮影

（左が富永友四郎本人、中央は後の深川

造船所社長深川喜次郎と思われる）され

たものである。

翌月、梧竹は次の文章を揮毫し、富永友四郎に贈っている。



拙於世事者工於翰墨、精世事者疎翰墨、両伎備者少矣、富永君勤世事而耽翰墨矣、両相兼矣、春花秋実塵忙場裏閑辟、天地簿書堆中究娛絵事、身住欲界仙都心置宇内之宏広矣、筆之落処千奇萬変運於指腕之間、瀟洒落々生氣縦横溢、於素絹生箋半点無塵禪寒道瘦君伎倆多兼而渡世矣、君子不器可謂当代之名士

歟 丁未六月 贈富永君 潮々老人

この内容はあたかも富永友四郎の人物評価書ともいえる内容で興味深い。概略としては、富永君は若くして翰墨に興味を持っており、またその技量も高く当代の名士といえるといった内容である。友四郎、時に36歳。

また、大正三年（1914）二月二

十八日付けで送付された「鳳凰閣並三日月堂保存会」の寄付依頼書の中で、

「会務主任」として富永友四郎の名が

挙がっている。この当時は佐賀市道祖

元町株式会社（の所屬となっており、ちよ

うど深川造船所の本社があった場所であ

る。このことから梧竹没後も、梧

竹に繋がる人物として注目される。お

そらく特別賛成者・發起人一覧は、

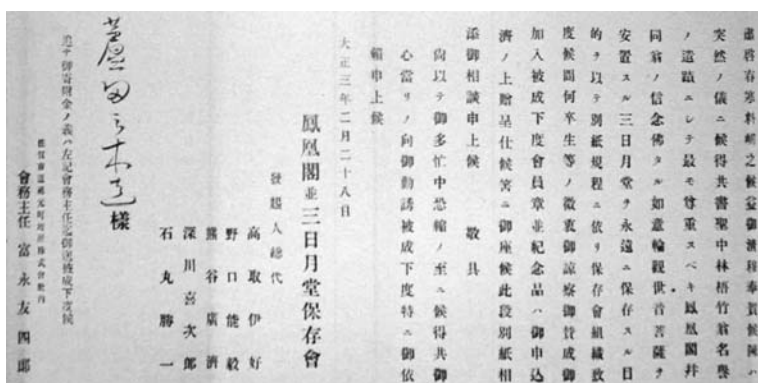
「鳳凰閣並三日月堂保存会」賛同者整

理のため作成されたものであろう。特

別賛成者には、小城出身の大臣であり、

梧竹知友の波多野敬直・松田正久の名

がある。この一覧に記された人物も興



味深いが本稿では考察を省略する。

新出の中林梧竹使用印

今回の調査で、新たに梧竹自用印五顆を実見することが出来た。拙稿「中林梧竹の使用印に関する基礎的研究」にて、考察した自用印がほとんどだが、ここで改めて再考察する。

① 「日本梧竹」・「再入燕山」



梧竹71歳。「日本梧竹」・「再入燕山」印は北京の石竹齋にて作らせた記録がある。今回の実見で古い印泥を拭き落し、現状の印影をとることが出来た。側款は印の下面に刻されている。

「日本梧竹」側款

「再入燕山」側款



側款はいずれも印面からすると、印材の下面に刻されている。「日本梧竹」には「北京石竹齋刻」、「再入燕山」には「光緒二十三年北京石竹齋刻」と刻されている。「光緒二十三年」は明治三十年（1897）である。また印材は青田石である。

本印は制作されて間もない頃と思われる作品の印影をみると、全く欠けが見当たらない。

「中林梧竹の使用印に関する基礎的研究」にて、以下のように考察した。「日本梧竹」は73歳九月作にて「本」の右と下欠けがみられる。75歳二月作では、「梧」字の左と「竹」字左下に欠けがみられる。また「再入燕山」は75歳二月作では上部の欠けは見られないが、75歳十二月作（図録での確認）では欠けがみられる。この欠けも自然なものとは思われない。76歳では「日本梧竹」の「日」右側上部に欠けがあり、86歳は欠けが二箇所を増えている。

今回新たにわかったことは、「日本梧竹」の「本」左下は、内側から刀をあてた形跡がある。他の欠けの状態も打ち傷という訳ではなく、人為的に撃刃した形跡が見受けられる。また「再入燕山」では、左外郭に三箇所欠けがある。一番下の欠けはすでに70歳代から見られるが、上の二箇所欠けは、80歳初め頃の印影では見受けられない。いつ欠けたのか今後調査を進めたい。

② 「雲中羅漢」・「梧竹」



本印も第二回渡清中に制作されたものである。本来は「雲中羅漢」・「神通自在」・「梧竹」の組み合わせで押印されている。「神通自在」は現在中林家所蔵だが、今回は新たに「雲中羅漢」・「梧竹」の印を実見することが出来た。

「雲中羅漢」側款

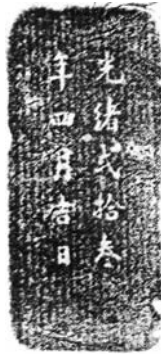


「雲中羅漢」の側款は、印材左側面に「日本梧竹先生清賞」と刻されており、右側面には梅の木が彫刻されている。印材は青田石であり、しっかりとした長方形ではなく、ややゆがみがある。

「梧竹」側款

80歳

77歳



「梧竹」の側款は、印材の下面に「光緒貳拾參年四月吉日」と刻されている。「光緒貳拾參年」は、前期の印と同じく、明治三十年（1897）である。また印材は田黄石である。ちなみに「神通自在」も田黄石であり、側款はない。

まず、「雲中羅漢」についてであるが、三つの組み合わせの内、この印だけが青田石である。側款にも「日本梧竹先生清賞」とあるところから、この印は梧竹へ送られたものと推察する。この印も初期の印影には欠けがない。現状では右下と上部左側に大きな欠けが見られる。特に左下欠けの上部は、内側から刀をあてたような欠け方であり、人為的な撃辺に見える。

「梧竹」は、四箇所に大きな欠けが見られる。この欠けは梧竹が80歳

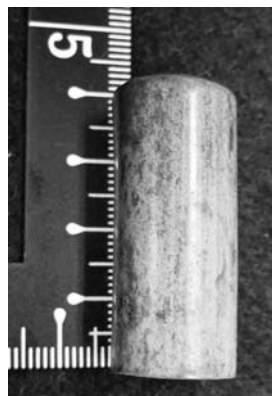
代に入って出来たものと思われる。今後詳細を調査したい。尚、側款から①の刻者とは別手のものである。

③ 「梧竹」

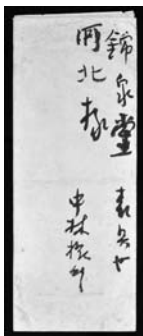


梧竹76歳の印影

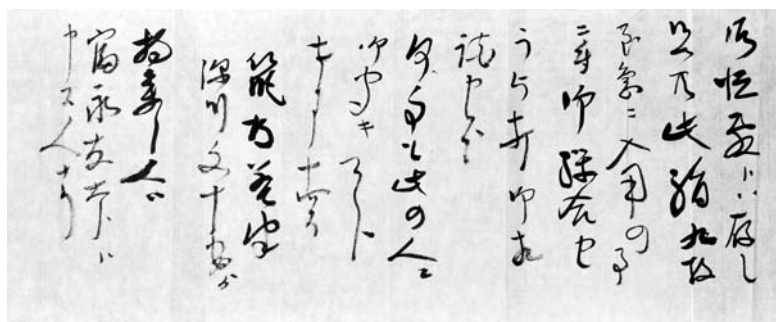
本印は、前回の論考では取り上げなかったものである。扇子に押されている例が多く、鮮明な印影が収録出来なかったこともある。今回は実印を確認することが出来、鮮明な印影を得ることが出来た。材質は竹である。上部がへこんでおり、竹の自然な形をうまく印字に反映させている。竹印であるので、年齢による印影の大きな変化は見られない。



中林梧竹の書翰



梧竹の書翰について考察していく。実際には五通の書翰が残されているが、ここでは三通の書翰について考察する。次に上掲の書翰釈文を示す。



(封筒) 錦泉堂 表具屋

河北様 中林梧竹

御忙敷トハ存し候へ共、此絹九枚至急二入用の事二付、御繰合せうら打御相談申上候、何事も此の人二御聞キ可被

下キ事、十四日

筑後若津 深川文十宅より持参し人ハ富永

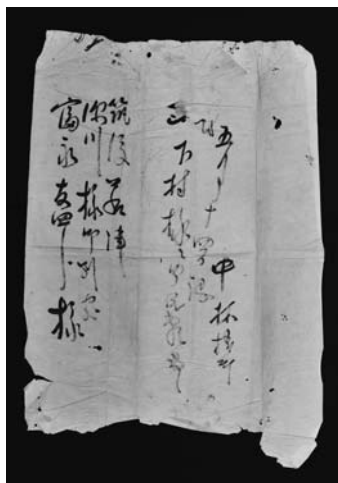
友太郎と申ス人ナリ

本文中にみられる深川文十は、前出した深川喜次郎の父であり、明治四十一年(1908)に没している。梧竹の動向と考え合わせると、この書翰は明治四十年に揮毫された可能性が高い。梧竹81歳。富永友四郎と出会った年ということになる。

次の書翰である。この書翰は中身と包紙からなる。次に釈文を挙げる。

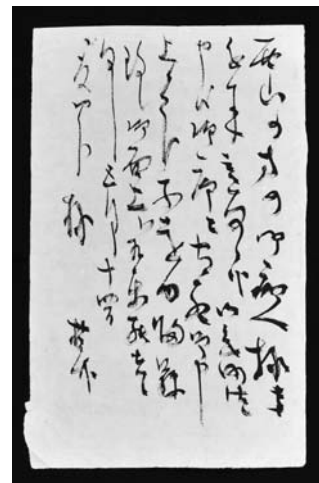
西山の方の御病人様も近来意何候哉、御無沙汰申候、御序二御参御申上候事、不遠内帰県致候、御面上候相楽罷在候、勿々

五月十四日 友四郎様 梧竹



(1912) 六月三日。梧竹86歳。署名の書風も近いことから、この年に揮毫されたものと思われる。

最後の書翰は、書翰と称するよりもメモ紙といった方がよいものである。掲載写真のように紙の切れ端に書かれている。



包紙

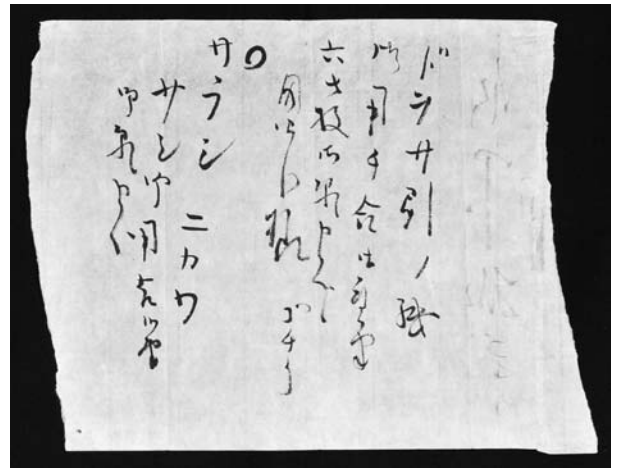
五月十四日 中林梧竹

下村様二御湯御依頼致候

筑後若津 深川様 御別宅

富永友四郎様

書翰の内容からは、揮毫年齢の確定が難しい。ただ平成二十二年に発見された石丸勝一宛書翰の中で、「帰県致し候間、不遠内御面上」というこの書翰と近い一節のものがある。消印は明治四十五年



朋四郎様 ゴチク
用事（紙裏に揮毫）

ドヲサ引ノ紙御用チ合御座
候半六十枚御頼申上候

朋四郎様 ゴチク

○

サラシ ニカワ

少シ御用合候半御願申上候

これはお使いメモといっ
てよい。富永友四郎は梧竹のそ

ばにいたのであろう。急ぎの用件をしたためたためか、片仮名交じりの揮毫で、○の後用件を加えている。所有者の方の証言では、友四郎生前の話として、梧竹が墨を落としてしまった作品を「駄目になったのであげよう」とその場で頂いていたということである。梧竹の人柄が偲ばれる話である。また、残されている梧竹作品も、82歳作、86歳と断定出来るものもあるので、友四郎は梧竹帰郷の際、お供をしていたものと考えられる。

前田黙鳳による中林梧竹への見舞い状

さて、今回の論考で取り上げる最も重要な資料である。前田黙鳳と梧竹の関係はこれまで出版された書籍に掲載されているが、今回のような梧竹本人に宛てた書翰は初の発見である。また、この書翰が重要なのは、

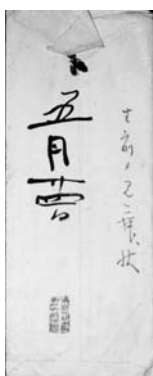
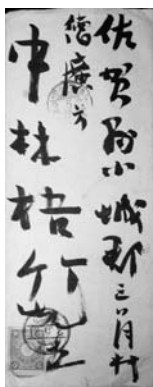
梧竹の座した揮毫の様子が描かれていることもある。

前田黙鳳は、嘉永六年（1853）三月生まれ。大正七年（1918）に没した。播州龍野（兵庫県たつの市）生まれの書家。名は圓、字は土方、黙鳳は号で、別号に龍野人がある。

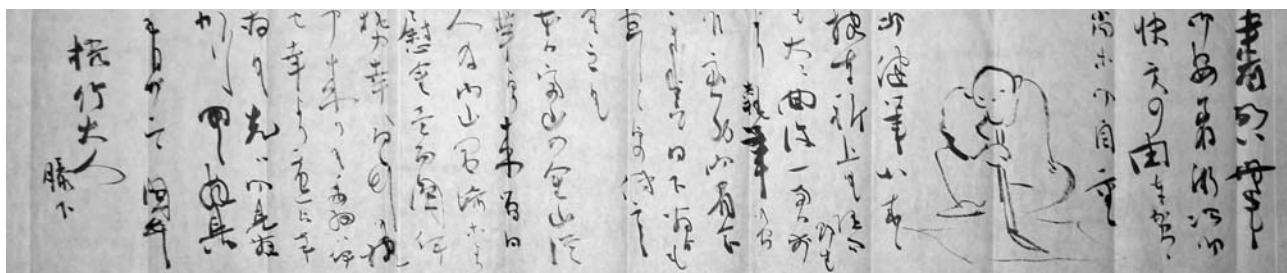
臨金文 前田黙鳳作



この書翰の文は大正二年（1913）五月二十二日の日付になっているが、封筒には同年五月二十一日の消印があり、小城の消印が同年五月二十三日となっている。封筒には「五月廿四日」と揮毫されていることから、前田黙鳳が梧竹の手元に届くことを考慮して、日付を書いたのであろう。封筒裏には「生前ノ見舞状」と朱書されている。富永友四郎の筆跡と判断する。おそらく梧竹の遺品を整理する際に出てきたものであろう。



ここで、大正二年の梧竹の動向を確認する。梧竹は大正元年十月十六



日、近所の理髪店にて髻剃中、左半身不随となる。翌大正二年四月六日の日付で前田黙鳳が、日下部鳴鶴・中村不折・田口米舫を發起人とし「梧竹翁慰問帳」を作成し募金した。

同年四月二十四日石丸勝一（当時の佐賀市長）は梧竹帰郷につき、看護人雇い入れをする。

同年五月十日、東京銀座「伊勢幸」を出立。

同年五月十一日、佐賀梧竹村荘着。六月下旬、嬉野温泉へ保養に出るまで梧竹村荘にて療養することになる。「伊勢幸」は東京銀座にあり、

明治十七年（1884）七月二十一日、梧竹が副島種臣・松田正久・波多野敬直ら郷土の人々の紹介で入居し、二十九年間に渡って梧竹が下宿した場所である。

今回の書翰は梧竹が帰郷した際に、出されたものである。その概略は次の通りである。

今回の書翰は梧竹が帰郷した際に、出されたものである。その概略は次の通りである。

肅啓。まずは無事に（郷里へ）ご到着とのこと。

（病も）快方に向かわれているとのことですが、尚ご自重下さい。筆を持ちたいというお気持ちもあるでしょうが。私も大いに回復し一兩日前より執筆をしているところですが、まだまだというところ。日下部翁（日下部鳴鶴）からもよろしくのご伝言がありました。

本日、富山の金山従革氏より書簡が参り、数名と見舞金壹百円、伊勢幸へ送られたとのこと。委細は伊勢幸からお知らせがあるでしょう。先ずはお見舞いを兼ねまして。勿々 拝具

五月二十二日 円頓首

梧竹大人 膝下

本文でみられる金山従革（1864～1936）は明治三十一（1898）年の第五回衆議院議員選挙にて、進歩党より立候補した衆議院議員である。佐々木氏の調査によれば、この当時の米俵価格は、金八円三十二銭の時代である。「壹百円」とかなりの金額となる。

この内容から推測するに、これは前出した「梧竹翁慰問帳」の募金宛先が「伊勢幸」となっていることから、「梧竹翁慰問帳」の趣旨に賛成した募金の知らせを、梧竹に送ったものとみられる。

次に梧竹が座して揮毫している図について考察していく。ここでは仮に「梧竹座揮毫図」と名付けたい。この「梧竹座揮毫図」が実際の梧竹の揮毫スタイルと一致するのか。

前田黙鳳が描いた梧竹揮毫図はすでに一点公開されているものがある。



上掲「神通自在」の作品は梧竹83歳、徳富蘇峰宅にて、揮毫されたものである。作品のサイズは縦が179センチ、横は79センチ。

徳富蘇峰の梧竹追悼文の中で、「数年前、予が青山草堂に黙鳳、香国、不折の諸家と共に翁の来訪したる辱際、紙片を丸めて墨池に投じ、直にそれを把て大画箋に大草字を作れり。」とある。画の筆者は落款から前田黙鳳と判明している。

また前田黙鳳は、前出の臨金文作のように、描写力に優れている。今回の「梧竹座揮毫図」と梧竹の肖像写真を比較してみると、簡潔ながらも梧竹の顔の特徴をうまく捉えている。この点に注目し、梧竹の揮毫スタイルについて考察を行ってみたい。

「伊勢幸」の女主人青木たけの証言が残っている。「字をお書きになるとときには長机を横にお控えになって横にお書きになるのです。ソレですから右のお肩平日少し高くお成りになって、右の臂が突張っていらして、右の手は山出しのおサンどんのようなお手でございました。」梧竹の立ち書きについては、拙稿にて言及したので、重複を避けたい。



ここで注目したいのは、「右肩が平日少し高く」と「右の臂が突張って」の部分である。肖像写真をみると右肩がやや高くなっている。前田黙鳳の画でも「右の臂が突張って」いることがわかる。右膝を立て、筆は中央よりかなり上を握っている。描かれている筆は「ナマズのヒゲ」と呼ばれた超長鋒であろう。この構えから察するに、横画を引く一瞬を捉えたものであろう。前田黙鳳が、画の隣に「健筆」と揮毫したのも、おそらくは、梧竹が健康体の時の揮毫スタイルを思い出して、描いたのではないかと思われる。補足すると、左足を大きく開くことで、身体の移動も楽になり、自然体でありながら、合理的な構えにみえる。



中林梧竹没後に送られた弔詞

この項目については、列举し補助資料としたい。

深川喜次郎宛 大正二年八月八日

渡辺沙鷗 香典と書状

深川喜次郎宛 大正二年八月七日

山内昇 弔詞

中林袈裟吉・江越孝太郎宛 大正二年八月九日

伯爵 渡邊千秋 香典と書状

中林袈裟吉宛 大正二年八月十八日

野田卯太郎 書状

渡辺沙鷗は、日下部鳴鶴に師事したが、同時に梧竹にもついた人物である。山内昇は号を香溪。梧竹が師事した山内香雪の後を継ぎ、梧竹とは兄弟弟子にあたる人物である。渡邊千秋は長野県（諏訪高島藩士）出身で、大臣経験を持つ政治家。野田卯太郎は福岡県三池の出身で、梧竹没後頃は衆議院議員を務めていた。中林袈裟吉は、梧竹の従者であり、庇護者であった徳廣源吉の次男で、梧竹が亡くなる直前に中林家の家督を継いだ。江越孝太郎は親戚総代として、梧竹の葬儀に関わった人物である。

おわりに

今回の様々な新資料の発見は、富永友四郎と関係がある方と中林秀利氏との出逢いがきっかけとなった。最初は梧竹自用印の調査の為、中林秀利氏と筆者がお宅に伺ったのであるが、床の間に飾ってあった梧竹の「富士図」を拝見し驚愕した。



それは昭和十二年（1937）、梧竹没後十五年を記念して佐賀で開催された展覧会図録「鎮国」の表紙を飾る作品であった。

二度目にお伺いした際に、新たに

特別賛成者・発起人一覧 二種

前田黙鳳による中林梧竹への見舞い状

中林梧竹没後に送られた弔詞 四通



を拝見することとなった。梧竹作品・自用印は『中林梧竹特別展 佐賀県内の作品より』図録（小城市立中林梧竹記念館）にて発表・公開された。釈文については、梧竹記念館学芸員田久保佳寛氏と筆者の共同作業であったことを付記しておく。梧竹関連資料については、この紀要が初公開となる。特に「梧竹座揮毫図」は梧竹の揮毫写真がない今、今後は貴重な資料となっていくであらう。



梧竹が使用した「ナマズのヒゲ」と称された超長鋒は、残念ながら現在に残されていないが、梧竹記念館が収蔵している長鋒の筆をみると、中央より下の筆管は墨で汚れている。だが「梧竹座揮毫図」を想起すれば、梧竹が筆管の上方を握っていたため、このような状態で現在に残されていると合点出来る。

2013年。梧竹没後百年が迫ってきた。梧竹は生前「自分が死んで百年もたてば理解するものが現れるであろう」と語っていたという。その百年が近づいてくるにつれ、新たな資料が発見されるというの不思議

議なものである。筆者もまた、梧竹が揮毫する際用いたのは、清の沈徳潜が編纂した『五朝詩別裁集』ではないかと確認を急いでいるところである。先鞭をつけるため、ここに付記しておく。今後も新資料の発見を期待するものである。

末筆になりましたが、今回の紀要執筆に関して、中林梧竹記念館の全面的ご協力、また中林家四代目・中林秀利氏、富永友四郎関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

【主な参考文献】

- 『中林梧竹特別展 佐賀県内の作品より』梧竹記念館 2011
- 『中林梧竹 人と芸術』佐々木盛行 二玄社 1983
- 『改訂版 書聖中林梧竹』日野俊顕 明玄書房 1979
- 『書聖梧竹と書の鑑賞』海老塚四郎兵衛 明玄書房 1960
- 『中林梧竹』佐賀県立美術館 1977 『蒼海・梧竹』佐賀県立美術館 1985
- 『中林梧竹』佐々木盛行 西日本文化協会 1991
- 『墨美』290 中林梧竹 (一) 生涯篇 1979
- 『墨美』294 印譜編 1979
- 『梧竹書芸集成』日野俊顕 講談社 1979
- 『中林梧竹書』日野俊顕 二玄社 2006
- 『墨スペシャル』19号 中林梧竹特集 芸術新聞社
- 『梧竹の会』会報
- 『墨』近代日本の書 芸術新聞社 1981
- 『中林梧竹の立ち書きと折り目に関する考察』勝目浩司 大学書道

- 研究第2号 全国大学書道学会 2009 所収
『中林梧竹の使用印に関する基礎的研究』勝目浩司・小原俊樹 福岡教育大学紀要 第57号 第五分冊 2008 所収